片親の娘

不知火　暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
片親の娘

【Ｎコード】
Ｎ５１４４Ｑ

【作者名】
不知火　暁

【あらすじ】
この話は片親の娘の感じた想いが綴られた話です。
オムライスに込められた想いを感じ取ってはもらえないでしょうか。

私には母がいなかった。
ずっと父が男手一つで私を育ててくれた。
父は優しい人でいつも私のことを考えてくれている人だった。
私の為に沢山仕事をしてくれて、ご飯も作ってくれたし、洗濯物も掃除も全て父がやってくれた。
母がいないことを不幸だと思ったことはないけれど寂しいと思うことはしばしばあった。
父は水商売をやっていて、私が寝る頃になると出かけて行って、起きる頃には既に寝ていた。
小さい頃はいつも一人で父を起こさないようにと気を遣って静かに遊んでいたのを今でもはっきりと覚えている。
勿論、動物園や水族館、遊園地とか、いろいろな所に連れて行ってもらったという思い出も沢山あるし、一人で遊ばされていたことに不満を感じている訳でもない。
ただ一人家に残された夜や一人でテレビを見ながら過ごす時間には寂しさを感じるのだった。
私が小学校に上がった位の時から私は父に対して申し訳なさを感じるようになった。
授業参観でお母さんたちの中に一人男である父が混じっていることや、引取り訓練の時に暑い中迎えにきてもらった時。父は面倒だと言うこともなく、授業参観で手を挙げることも出来ない小心者の私の姿を見にきてくれたり。父はもしかしたら嫌な思いをしていたのではないだろうか。
そんなことを子供ながらにして思っていた。

私は父が大好きだった。

しかしある時、私は父と喧嘩をした。
小学校五年生の時である。
父は見に来る、と言っていた運動会に来なかった。
運動が苦手な私は父に頑張っている姿を見せようと一生懸命だった。
リレーでは二位だった。
珍しく高い順位だったので、父に褒めてもらおうと思ったのに、探しても探しても父の姿は見当たらなかった。
私は持ってきたお弁当を友達と一緒に寂しいおもいをしながら食べた。
その日。
家に帰った私は父に訊いた。
「運動会来てくれなかったの？」
すると父は申し訳なさそうに目を伏せて、
「ごめんね…」
と言うだけだった。
「来るって言ってたのに？」
「本当に、ごめんね…」
父にそんな顔をさせたかった訳ではなかったのに、私は涙目になりながら、
「…いいよ。」
と、小さい声で言って、部屋に飛び込むとものすごい勢いで扉を閉めた。

次の日。
水商売をしていた父は偶に帰ってくるのが遅かったりする。
朝の六、七時には帰って来るのだが、稀(まれ)に帰りが十時頃になることがある。
その日は父は八時を過ぎても帰ってこなくて、前日のことを引きず

っていた私はそのことに腹が立って、書置きもせずに友達と遊びに行った。
仕方がないことなのだと分かってはいても、まだまだ子供だった私には簡単に割り切れるような問題ではなかったのだ。
心のどこかにずっと引っかかるものを感じながらも私は友達と遊び続けた。
お昼はファーストフードで済ました。
午後も沢山遊んで、いつもよりも遅く、六時に帰った。
家に帰ると父が慌てた様子で玄関まで出てきて私の顔を見て安心したような顔をした。
「お帰り。お腹すいた？」
私に優しくそう言った。
きっと父なりに私に気を遣ってくれたのだろう。
その日の晩御飯は私の大好きなオムライスだった。
料理が得意な父のしょっぱい味のオムライス。
あったかい気持ちになる、オムライス。
父が何を思ってこのオムライスを作ったのかを考えると、涙が出てきた。
「おいしい？」
俯きがちに食べてた私に父が訊いてきた。
「うん。ファミレスよりおいしい」
私は溢れてきた涙を父に見られないように目を逸らして言った。
父の視線を感じながら、私はテレビをずっと見てるふりをし続けた。

一週間後。
父は私に仕事を辞めたことを告げた。
「え？なんで」
私は驚いて父に理由を問うた。
「体に悪いからね。」
父は微笑んでそう答えた。

私が思うに、父は私の運動会に来れなかったことを後悔していたのかもしれない。
本当のことは未だに分からないのだけれど。

それから父はアルバイトをしながら仕事を探し始めた。
前よりも一緒にいられる時間は増えたけれど、私は父が焦っているように見えた。
なかなか仕事が見つからないことに焦っているように見えた。

そして、ついに父は仕事を見つけて、前よりも忙しいんじゃないかと思うほどに休みがなかった。
それから遊園地にも動物園にも水族館にも海にも川にもプールにも連れて行ってもらえなくなってしまったけれど。
頑張っている父を見るのは好きだったから。
寂しい思いもしたけれど、私は父を応援しようと思った。
中学にあがった頃からは体育祭にも文化祭にもマラソン大会にも授業参観にも来なくなってしまったけれど、一緒に朝ごはんを食べることが出来るようになったことを考えると今の仕事も良いものだな、と思えた。

父と喧嘩をしたあの日から十年。
私は二十一歳になって、現在某有名大学に通っている。
父はもう空へ旅立ってしまったけれど、父と過ごした日々は忘れっぽい私でも不思議と鮮明に覚えている。
いろんな人から仲のいい親子だと言われていたことを思い出すと今でも誇らしい気持ちになる。

私は久々に父の墓を訪れた。
私の名字が刻まれた墓石に手を合わせて、花とお水を替える。

墓石にもそっと水をかける。
「もうすぐ試験があります。絶対上位に入るからね」
私は花を整えながら墓石に話しかける。
父の声を思い出しながら、心の中で頑張れと呟く。
「はるかの…娘さん？」
と、そこに聞き覚えのない声が耳に入る。
振り向くと一人の女性が立っていた。
「ええ。そうですけど。お父さんのお知り合いですか？」
はるかは父の名前だ。
その女性は淡く微笑んで、ええ、と頷いた。
「河原（かわはら）と申します」
女性は頭を下げて丁寧に言った。
私も合わせて名前を名乗って頭を下げた。
「はるかの娘さんは随分と礼儀正しいお嬢さんなのね」
河原さんは目を細めて笑う。
「そうですか？」
私は照れて、視線を少し下げた。褒められたことが嬉しかった。
そこで。河原さんの腕にある腕時計がバイトの時間の五分前を示していることに気付いた。
「あ、すいません。私、用事があって。お先に失礼します」
慌てて帰る準備をして河原さんに言った。
「お父さんの代わりに、私からありがとうございます」
鞄を肩にかけてそう言って、河原さんを見ると少し悲しそうな儚（はかな）い笑みを浮かべていた。
「こちらこそ、ありがとうね」

バイトを終えて家に帰る途中、私は父のオムライスを思い出していた。
私が父のオムライスを作ろうとどんなに頑張っても父と同じ味のオムライスは出来ないのだ。

「どうやって作ってたんだろう、お父さん」
私は空を見上げて呟いた。
月や星は黒い雲に覆われてよく見えなかった。
今日の晩御飯はオムライスにしよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5144q/

片親の娘

2011年10月8日15時44分発行